

私、貴方、彼の人

——中期ビザンティンの献呈図と、献呈文中での人称をめぐって——

太田 英伶奈（早稲田大学）

4-15 世紀にかけて地中海東沿岸で栄えたビザンティン帝国では、帝国の存続中間断なく各種の献呈図が作られ、聖堂や写本、イコン等を飾っていた。これらの献呈図には献呈文が伴うこともしばしばであった。しかし、献呈図に伴う献呈文の中で、献呈図に表されたパトロンがどのような人称で言及されているか（あるいは、献呈文における発話主が誰であるのか）という問題はこれまで特段研究者の耳目を集めてこなかった。献呈文ではパトロンが「私」と自分自身に言及する一人称が最も多く使われていると思われるが、実際にはパトロン以外の発話者がパトロンを「彼／彼女」と名指す3人称も頻出する。また、少数ながらパトロン以外の発話者がパトロンの「貴方」と呼びかける2人称で書かれた献呈文も存在する。献呈文はパトロンの意図や自意識が色濃く反映される部分であるため、その中でパトロンがどのような人称で自らを呼ばせているかという視点から献呈図を整理すれば、ビザンティン美術におけるパトロン活動の研究に新たな局面が開かれるものと思われる。

本発表では試みに、中期ビザンティン写本装飾を代表する傑作であるパリ国立図書館ギリシア語 74 番写本（本文四福音書、11 世紀後半、以下パリ 74 番）を考察の主な対象とする。当写本はコンスタンティノポリス最大の威容を誇ったストゥディオス修道院の逸名院長により注文されたことが献呈文から明らかであるものの、このパトロンの詳細や注文の動機についてそれ以上の事項は判明していない。注文したパトロンの素性に少しでも迫るべく、発表者は当写本に残された4点の献呈図とそれに伴う献呈文に着目する。まずは写本に残された4点の献呈文においてパトロンが1人称・2人称・3人称のうちどの人称で呼びかけられているか確認する。続いて主に9世紀以降のビザンティン帝国で制作された献呈図に伴う献呈文（ただし、膨大な量が現存する貨幣および印章は除く）を比較事例とし、使用される人称とパトロンの属性に何らかの相関性が見られるか検討する。パリ 74 番でパトロンの言及する際には2人称・3人称が使用されているが、他の献呈文で2人称が用いられる場合、パトロンは皇族、特に皇帝であるという結果が得られた。この結果は、パリ 74 番に残された献呈図で使用されている特殊な構図がやはり皇族によって使用されている事実と一致する。というのは、通常の献呈図では生身の人間である献呈者がキリストや諸聖人といった被献呈者に聖堂のマケットや写本等の事物を捧げる構図が採用されるが、皇族が献呈者となる献呈図では、被献呈者である聖なる存在が献呈者である皇族に事物を授与しているのである。したがって、パリ 74 番のパトロンはビザンティン帝室に非常に近いのか、縁続きの人物である可能性が考えられよう。